



## ローマ神話と歴史の傷跡

小川 正廣（西洋古典学）

ウェルギリウスのローマ建国叙事詩『アエネイス』の中に、心に迫るこんな場面があります。将来建国の父となる英雄アエネアスが死者の国を訪れたとき、放浪中に世話になり、妻のように愛したカルタゴの女王ディードと思いがけなく再会したのです。英雄は涙を流して語りかけます。「何とあなたは、私のせいで自害なさったのですか。カルタゴを去ったのは、私の本意ではなく、神々の命令でした。けれど、あなたの心の痛みはよくわかります。だからどうか、私に顔を向けてください。」しかし女王の亡霊は、無言で眼をそむけたまま闇の中へ消えていき、アエネアスは深い後悔におそわれます。

じつはこの神話的エピソードは、古代ローマが異民族カルタゴと戦った歴史を背景にしている、長く激しい戦争の末に滅ぼしたカルタゴ人への罪責の気持ちを表わしています。そして、詩人がこれを書いた帝政初期は、そのポエニ戦争から百年以上ものちの時代でした。歴史とは不思議なもので、文明が十分成熟し、民族も「おとな」になったとき、はじめて不幸な過去と向きあえるものなのでしょう。



中国・南京市、虐殺記念館前の彫刻  
2012年1月撮影

私は学生の頃からウェルギリウスの古典を読んではいますが、今頃やっと、この逸話にこめられた詩人の想いがわかるような気がします。戦争で民族が犯したあやまちは、取り返しがつきません。しかしそれを直視して、親や祖父の世代が——不本意であれ、誰かの命令であれ——どんな苦しみを他の民族の人々に与えたのかをよく知って理解することは、まだ遅くはないのかもしれませんが。むしろ、私たちは、ようやく冷静にそれができる時代に生きているのではないのでしょうか。直接の犠牲者の多くは、もうこの世を去りました。けれど詩人のように心の眼ざしを向けるなら、今もまだ癒えていない歴史の傷跡が見えてきます。

授業紹介—File58

## 『詩を学ぶ』って結局、何？

専攻：中国文学（哲学・文明論コース）

授業名：唐詩集注選読

みなさんは小学生の頃から国語の授業で、たくさんの詩に触れてきたのではないのでしょうか。詩をクラス全員で音読したり、時には詩に描かれた情景を絵に表してみたりと、様々な方法で詩を理解しようとしたのではないかと思います。

これらの詩と、本授業で扱われる唐や宋の時代の詩では、まず「言語の違い」があります。当然のことながら詩は日本語では書かれていません。また、「時代背景の違い」も大きく問題になってきます。二十一世紀を生きる私たちと七世紀の大陸の人では、生活様式も食べるものも移動手段も、何もかもが違うのです。

本授業では、受講生で順番を決め、詩を少しずつ読み解いていきます。今期は、「韋応物」という人の作った詩について学びました。私たちとは全く立場の異なる彼の詩を理解するため、担当者は範囲の詩の語句を一文字ずつ丁寧に調べて意味を探り、書き下し文と現代語訳をつくります。この



書籍でいっぱいの中文研究室

時、単に訳を付けるだけではありません。作者の思いを如何に汲み取っていくか、一文字一文字丁寧に考察していきます。当時の社会でどのような事件が起こっていたのか、また、作者韋応物が当時どのような生活していたのかを調べ、授業では他の受講生の方々にもご紹介できるような資料にまとめます。両腕を広げても抱えきれないような大きな辞書で語句を調べ、関連する書物に少しでもヒントが無いかと研究室や図書館の本の森を探索します。その中で、これまでに沢山の先生方が遺した注釈を参考にしますが、こちらも中国語であることが多く、意味をつかむのに苦労することもしばしばです。しかし、多くの先生方の教えを少しずつ吸収していく中で、一步一步作者の思いに近づいていく実感を得られます。また、授業中でお伺いすることの出来る先生の解釈は、大変勉強になります。

もう私たちが「どういつもりでこの詩を書かれたのですか？」と、逢って伺うことのできない作者たちと、多くの文献をヒントにしながらかつ話していく作業は、時に困難ではありますが大きな達成感と満足感を得られます。私自身、詩を学ぶことを通して、相手の気持ちを探ることをもっと学んでいけたらと思います。

[渡邊 光歩 (学部3年, 執筆時)]

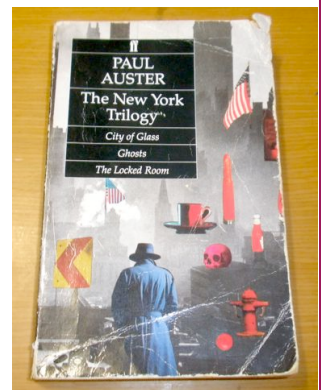
授業紹介—File59

## 本の中の探偵・本を探る探偵

専攻：英米文学（文学・言語学コース）

授業名：ポール・オースター研究

「それは、一本の間違い電話から始まった——」アメリカの現代作家ポール・オースターの代表作のひとつ、『ガラスの街』はこんな書き出しで始まります。間違い電話の主の依頼を聞き入れることに決めた主人公は探偵の仕事を引き受けることになり、美しく謎めいた依頼人との面会を経て事件の捜査に乗り出します。当然、我々はお馴染みの探偵小説の展開を期待します。さらなる事件が起こり、犯人捜しが始まり、探偵の華麗な活躍によって見事に真相が明かされ、めでたしめでたし……。けれどもこの主人公はシャーロック・ホームズやエルキュール・ポワロのように事件を解決してくれません。それどころか、捜査すればするほど謎ばかりが深まり、まるで不思議の国のアリスのように、不確かな世界へと迷い込んでいくのです。ニューヨークというガラスの街の中では、ガラスに映った自分自身が無限に増殖し、人の歩いた軌跡が文字を浮かび上がらせます。



The New York Trilogy

私たちの仕事は主人公と一緒にニューヨークの街でさまよいながら、彼がぶつかる様々な問題を一緒に考えることです。「自己とは何か?」「言葉とは?」「書く側と書かれる側を隔てるものはあるのだろうか?」これらの問いに、探偵小説のように明確な答えは容易されていません。文学の中では皆さんのよく知っている名探偵が言うように、「真実はいつも一つ」なんてことはないのです。

けれども私たちもまた探偵なのです。探偵が現場を捜査するように、私たちは本の中を歩きまわります。そして丁寧に周囲を観察しながら、証拠をひとつひとつ集めてゆきます。集めた証拠を組み立てて、我々の「灰色の脳細胞」を駆使しながら、上の難問に自分だけの答えを見つけるのです。

[山田 結真 (学部4年)]

最近の文学部

## 名大祭は6月です!

本年度で54回目を迎える名古屋大学の大学祭、「名大祭」は、6月6日～9日に「飛びだせしゃちほこ～祭りの空へ～」というテーマのもと、今年も盛大に開催されました・・・と、書きましたが、この名大祭は6月初旬に開催されており、毎月10日発行予定という本誌の都合により、残念ながらいつも予告や報告を掲載することが適いません。私立大学の大学祭はたいてい秋に行われるのですが、名大はこの季節と決まっています。梅雨空が心配な時期なのですが、4月にサークルやクラスで知り合った新しい仲間との絆を深める良い機会にもなっています。一年も先の話で恐縮ですが、みなさん、ぜひ一度遊びに来て（あるいは名大生としてご参加）下さい！（U記）